

宮崎県椎葉村大河内地区における焼畑農業

椎葉康喜, 内海泰弘 (九州大学農学部附属演習林宮崎演習林)

1. はじめに

焼畑農業は稲作を行うことが困難な山地に暮らす人々にとって自分たちの食料を確保するための重要な手段であり、比較的近年まで日本各地で行われてきた。九州山地に位置する宮崎県椎葉村は土地の大部分が急傾斜の山林であるため水田の開設が進まず、住民の多くは焼畑農業を生計としてきた。椎葉村大河内地区(以下、大河内地区)に位置する九州大学農学部附属演習林宮崎演習林(以下、演習林)内にも演習林設置(1939)以前に焼畑が行われた跡が数箇所点在しており¹⁾、演習林設置後も1965年頃までは造林のための地拵えでは火入れが行われ、1955年頃まで苗木の間で作付けに適した箇所に穀物が栽培されていた。しかし、焼畑から造林地へ転換していく過程で大河内地区から焼畑が次第に消失し、高度経済成長期末期頃の1970~1975年には新たな焼畑は作られなくなった。その後30年以上の時間が経過し、焼畑農業に詳しい地域の年長者が少なくなり、これまで受け継がれてきた焼畑に関する文化が次世代に継承されることなく消失する可能性が高まっている。そこで本論では大河内地区でかつて行われていた焼畑農業についての詳細を記録することを目的とした。

2. 調査方法

大河内地区の焼畑農業について、発表者の一人(椎葉)が少年期であった1960年代以降に地域の年長者から聞いた話と、演習林に雇用された1967年以後に大河内地区出身者の職員・日々雇用者の方々から伺った話をもとに記述した。同時に著者の一人(椎葉)の親族や、大河内地区出身の知人から得た情報を参考にした。加えて焼畑開設作業の詳細について、大河内地区で生を受け、幼少期から現在にいたるまで当集落に居住している78~86歳の焼畑農業経験者4名に2009年8月3、5日と9月11日、10月23日に聞き取り調査を行い、蓄積した資料と照合して取りまとめた。

3. 結果

3.1 大河内地区における焼畑農業の概要

大河内地区では焼畑のことを方言で「ヤボ」、焼畑開設のための天然木伐採を「ヤボ切り」、ヤボ切り後の火入れのことを「ヤボ焼き」と言う。ヤボにはヤボ焼きの時期に応じて「春ヤボ」と、「夏ヤボ」の二通りがあり、大河内地区では春ヤボを作ることが多かったが、一年のうちで春ヤボと夏ヤボを両方開設することも普通に見られた。春ヤボはヒエヤボとも呼ばれ、夏ヤボはソバヤボとも呼ばれた。春ヤボでは一般に当年にヒエを生産し、翌年からはアワやアズキなどを2~3年作った。夏ヤボでは当年にソバを作り、2年目にヒエ、アワ、3年目にはアズキやダイズを作った。

春ヤボは集落より水平距離で500~5000mくらい離れた標高700~1200mの比較的古い林地の斜面に作られることが多かった。これに対して夏ヤボは家の近くに作られることもあり、概ね標高600~900m付近の比較的若い林地に開設された。斜面の方向は日当りの良い南向きが多く西向きにも作られた。明治から昭和初期にかけては春ヤボの場合は約15~20年、夏ヤボの場合は7、8年の休閑期間の後に再び焼畑が開設されていたが、1939年に九州大学演習林が大河内地区の土地を購入し、スギの造林を行うようになると、演習林からスギの苗木を譲り受け焼畑に植林するようになった。

3.2 焼畑の開設

1) ヤボ切り

春ヤボの場合はヤボ焼き前年の9、10月に、夏ヤボの場合は当年の7月にヤボ切りを行った。ヤボ切りは、ヨコジリ(横尻、図1)から始め、斜面に対して横辺が概ね均一になるように調整しながら上方へと林を切り開いた。立木や草本などを切る場合は、できるだけ地際から切り、火を入れた際に地表までよく焼けるように切った。また、倒した木々は枝条等を小さく切り分け、斜面に対して横に置いた。ヤボ切りの範囲内に直径10cm程の燃えにくい木が5m程度離れて斜面に平行にある場合は、その立木を手の届く高さのところで切ってそのまま残して置き、これを、秋の作物の収穫時にヒエやソバの束を乾燥させるために掛ける竹竿の支柱にした。当地区では大人1人1日の仕事量を「1人ボシ」と言い、1haにかかる人員は約20人ボシであった。

2) ヤボ焼き

春ヤボの場合は3月末~4月中旬に、夏ヤボの場合は8月中旬頃ヤボ焼きを行った。ヤボ焼きは一連の焼畑作業の中で危険を伴う最も重要な作業であるので各部落ごとのカテゴリーと呼ばれる共同作業とされた。1戸からヤボ焼の経験がある者1人以上を無報酬で必ず出す取り決めがあり、少なくとも10人前後は集まっていた。

周囲の林地への延焼を防ぐため、ヤボ焼きの前にヤボの周囲の枝条を取り除き、帯状に防火帯を作った。この作業をカダチ（火断ち）と言った。この作業では上方の辺（ヨコガシラ、横頭、図1）は三間（5.0 m）以上空けないと延焼の危険が高いとされ、斜面両側の辺（タテグル、縦周、図1）は2～3m程の幅で取り除けば良いとされていた。ただし、ヨコジリには防火帯を作る必要はなかった。

昼は炎が見えにくいのでヤボ焼きは行わず、火を識別しやすい夕方から始めることが多かった。指示者はヤボ焼き当日の風向き等の気象状況を考慮して、ヨコガシラへの最初の着火場所とその後の着火順を決定した。指示者は火をつける役3名を指名し、あとの人員はヤボからの飛び火によりヤボ以外が延焼することを防ぐため、消火役として火消し棒を持ち斜面上方のカダチ上端左右の角にそれぞれ2名程度配置し、残りの人員はカマサキ、カマデのカダチ寄りに配置した。火消し棒にはスギやヒノキ生枝とヤブツバキやウラジログシなどの常緑樹の生枝および小径木の幹が使われた。全長が1.5mほどで手元の握る部分の直径が4cmくらいになる先端がよく茂った枝を選び、手元から小枝を落として残った先端60～70cmをつるなどで縛って箒状にした。

多くの場合、指示者はヨコガシラの中央を最初の着火点とし、一人目に火をつけさせた（図1、①）。ヤボに火をつけてまわる種火を持ち運ぶティ（ハチクヤマダケを長さ1.5m程に切ったものを小割にし、手に持ちやすい大きさにつるで束ねたもの）は火の勢いが強くないと着きにくいことがあり、その場合はそばの木々を少し集めて焚き火を作り、火の勢いを強めた。続いて、準備しておいたティに二、三人目に火をつけさせ、2人に付けていく方向を指示して移動させた。着火位置からそれぞれが逆方向に分かれて概ね等間隔で火を順次つけていった（図1、②）。このとき、お互いに見合わせて時機を測りながら燃やしていき、ヨコガシラ両端に至るとそのまま火を付けつつ少々下った（図1、③）。あとは同様に斜め下方向への往復移動を繰り返しながら畑地の上半分程まで下っていった（図、④）。

上半分程が焼けてしまうころに指示者が声をかけ、火つけ役の2人がタテグルの下半分に順次火をつけて下り（図1、⑤）、ヨコジリの中央付近で両者が出会うよう調整し両者が出会ったところで点火は終了となった（図1、⑥）。このヤボ焼きの最終段階を大河内地区ではヤボのつけまわしと呼んでいた。

ヤボが斜面上方から焼けて下ると共に、火消役もタテグルのカダチに待機しながら下りていった。最初に火をつけた者はカマサキまたはカマデのカダチ寄りに移動し消火役に加わった。作業終了後は、カダチをひと回りして、延焼の恐れがないことを確認してから全員引き上げた。ヤボ焼き作業が終了するとヤボの持ち主の家に帰り、御神酒を酌み交わすダレヤメという集いを行った。

3) 木焼き

ヤボ焼き後、焼け残りの木々や枝条を数箇所を集めて焼き、植林や穀物の種蒔きが容易にできるようにした。これを「木焼き」という。木焼き作業は、ヤボがよく焼ければ必要ない作業であるが、ほとんどの場合焼け残りがあり、一日中火の付近にいるので身体が非常に疲れる重労働であった。ただし、燃え残った木を集めて木焼きしたところの土地は灰の量が多くなり作物の生育は良好であった。

1) 椎葉康喜, 内海泰弘 (2009) 九州大学宮崎演習林の地名. 九州大学農学部演習林報告 90: 99-114

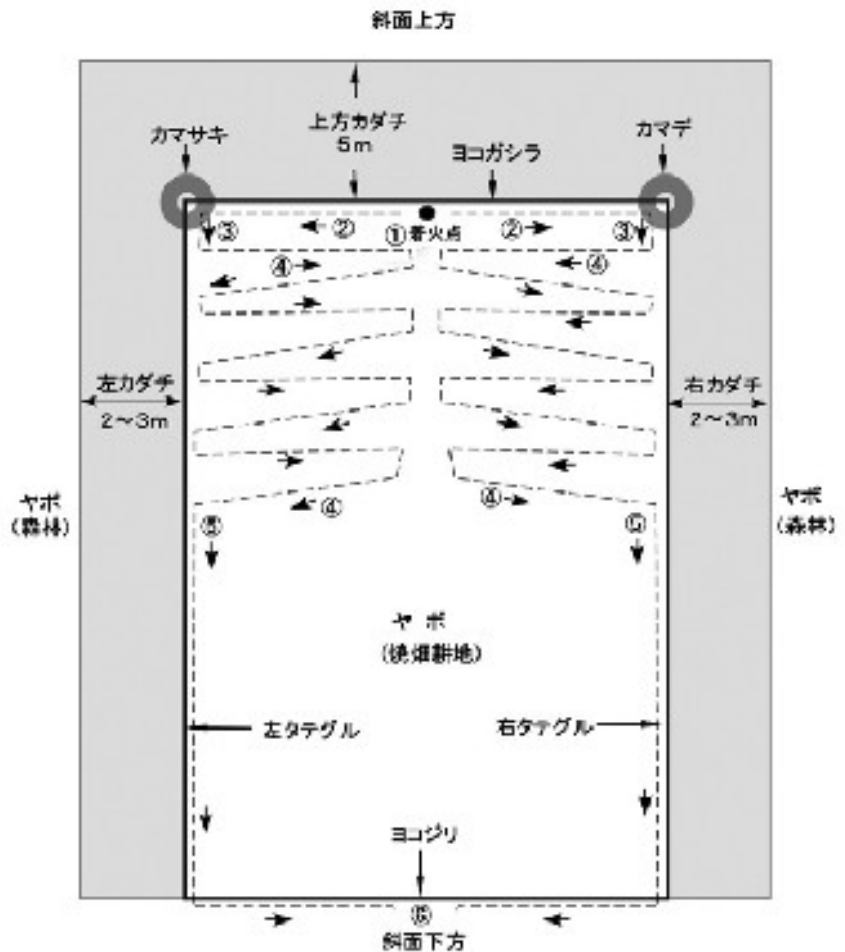


図1 焼畑内の場所と着火順路